

表はず事が出来たら、外に望む事さへ無いと迄、思ひ込んだ、其日は早く宿に歸つて、半切を貼る、棹を一日かゝつて造つた、其から後と云ふものは、面白くもない他のものには目もくれず、専心に水の研究に勉めた。

穂高の麓を覆ふ、暗い雲の蔭、柳や白樺の緑に輝いてゐる、暖い日の光、知らぬ人には信ずる事も出来ない様な、美しい緑色の水が、白や赤や黄色の岩の上を、なだらかに流れて来る、其岩の上に立つて、廣い美しい水の面を眺めて居ると、私の心持は、體さへも共に、奥の々々方へ吸ひ込まれてしまふ様な、心持になるのであつた。

喧しい流の響さへも、妙なる音楽の調べとも聞かれて、今迄に私の頭を駆けめぐつて居た怖ろしさは、跡方も無く成つてしまつた。

私は終日、其河原の岩の上で、美しい流を見て、自分を忘れてゐるのであつた。

豫定の滞在日も、終つた時、兎に角出来上る事は出来上つた、然し折角の美しい自然を、自分の表はさうとした心持さへも、満足に表はず事は出来ず、此の様な何の感興も無いものを描き上げたのは、自然に對して、申譯もない次第だ、只己の技の至らぬ悲しみを、自然に訴へるより外仕方がない。

こんな經歷を以てゐる——緑色の流——は、只平凡に、種々な色が并べられたのみに過ぎないものになつてしまつた。

記憶に残れる水彩畫(一)

K M

甘い御馳走を喰つて程経てから、其甘かつた御馳走のことを思出すと、又そこに一種の味を覚えるものであります。繪などを見ても矢張此麼場合がある。否却て後の聯想が、實際の物を見るより遙に優つて居ることも無いでは無い。

そこで私は、自分が嘗て見た水彩畫で、未だ記憶に残つて居る繪に就て、思ひ出す儘を書き列べて見やうと思ふ。然し茲に御斷りを致すのは、外國で見た繪は總て御預りとして、これ迄日本で見た繪に就てのみ書くに致します。

偕私の抑最初水彩畫を見たのは、明治十八九年頃でした。未だ小學校に通つて居た時代で、芝高輪に住んで居ました、丁度某日學校から歸宅してそれから又先生の處へ復習に出懸け様と思つて、本を抱へて少し遠廻りだが、何の氣無しに高輪南町から泉岳寺の門前にやつて參りました、すると門前に黒山の様に入が集つて居る。これは何か喧嘩でもあるのかと、私も未だ幼心に所謂怖いもの見たさに、人の後から覗いて見ました、すると喧嘩では無い。即ち其所で寫生を書生風の人が頻にやつて居る、一人かと思つたら三人も居る、皆畫架を列べてと今なら云ふ處だが、其時は畫架などは一人でも使つて居無い、皆膝の上に畫囊を置いてその上で描いて居ます、三人共に泉岳寺の門を寫して居る。丁度夕日が高い松の木の上に黄色に映つて、何も知ら無かつた私も大變面白い圖だと思ひました、三人の内二人の繪



表はず事が出来たら、外に望む事さへ無いと迄、思ひ込んだ。其日は早く宿に歸つて、半切を貼る、紳を一日かゝつて造つた、其から後と云ふものは、面白くない他ものには目もくれず、専心に水の研究に勉めた。

穂高の麓を覆ふ、暗い雲の蔭、柳や白樺の緑に輝いてゐる、暖い日の光、知らぬ人には信ずる事も出来ない様な、美しい緑色の水が、白や赤や黄色の岩の上を、なだらかに流れて来る、其岩の上に立つて、廣い美しい水の面を眺めて居ると、私の心持は、體さへも共に、奥の々々方へ吸ひ込まれてしまふ様な、心持になるのであつた。

喧しい流の響さへも、妙な音樂の調べとも聞かれて、今迄に私の頭を駆けめぐつて居た怖ろしさは、跡方も無く成つてしまつた。

私は終日、其河原の岩の上で、美しい流を見て、自分を忘れてゐるのであつた。

豫定の滞在日も、終つた時、兎に角出来上る事は出来上つた。然し折角の美しい自然を、自分の表はさうとした心持さへも、満足に表はず事は出来ず、此の様な何の感興も無いものを描き上げたのは、自然に對して、申譯もない次第だ、只己の技の至らぬ悲しみを、自然に訴へるより外仕方がない。

こんな經歷を以てゐる——緑色の流——は、只平凡に、種々な色が并べられたのみに過ぎないものになつてしまつた。

記憶に残れる水彩畫(一)

K M

甘い御馳走を喰つて程経てから、其甘かつた御馳走のことを思出すと、又そこに一種の味を覚えるものであります。繪などを見ても矢張此處場合がある。否却て後の聯想が、實際の物を見るより遙に優つて居ることも無いでは無い。

そこで私は、自分が嘗て見た水彩畫で、未だ記憶に残つて居る繪に就て、思ひ出す儘を書き列べて見やうと思ふ。然し茲に御斷りを致すのは、外國で見た繪は總て御預りとして、これ迄日本で見た繪に就てのみ書くに致します。

諸私の抑最初水彩畫を見たのは、明治十八年頃でした。未だ小學校に通つて居た時代で、芝高輪に住つて居ました。丁度某日學校から歸宅してそれから又先生の處へ後部に出掛け様と思つて、本を抱へて少し遠廻りだが、何の氣無しに高輪南町から泉岳寺の門前にやつて参りました。すると門前に黒山の樓に人が集つて居る。これは何か喧嘩でもあるのかと、私も未だ幼心に所謂怖いもの見たさに、人の後から覗いて見ました。すると喧嘩には無い。即ち其所で寫生を習生風の人が集つて居る、一人かと思つたら三人も居る、皆畫架を列べてと今なら云ふ處だが、其時は畫架などは一人でも使つて居無い、皆膝の上に畫囊を置いてその上で描いて居ます、三人共に泉岳寺の門を寫して居る。丁度夕日が高い松の木の上に黄色に映つて、何も知ら無かつた私も大變面白い圖だと思ひました、三人の内二人の繪



W. P. Smith

は眞黒で餘り感心もしませんでした。一人一番小さい若い人の繪は色が美しく、門の家根の瓦など本物を觀る様だと思ひました。又松の枝なども前の方に浮き上がつて、奈何すれば此處に行くのかと、私は先生の所に稽古に行くのも忘れて了つて立つて見ました。繪は段々と出來上つて、一番前の地面にある小石迄が寫されて、愈々感心して水彩畫とは此處に面白いものか、此の人々は何所で習つて居るのであらうなど、既うその日は夜寝る迄夫れのみを考へました。私が一時間の餘も立つて見て居る内に、一緒に見て居た大人の人がその書生さんと話して居たのを聞きましたが、何んでも牛込邊から來たのだと云つて居ました。今思へば當時盛に多くの青年を集めて教育されて居た、牛込新小川町の彰枝堂の生徒であつたかも知れません、彰枝堂とは本多錦吉郎先生の畫塾です。

其後水彩畫の寫生は兎も角、水彩畫を見るだけでも可いから、何所かで見たいものと懇つて居たが、中々見る機會がありませんでした。其頃から銀座通りに一軒油繪などを陳列して居る畫店があつて、日曜日など高輪からブラ／＼と散歩ながらと云ふと大變體裁が可いが、實は圓太郎馬車へ乗るのも贅澤と思つて、砂埃の中をテク／＼と歩いて見に行つたものです。然し水彩畫は日本畫の様な絹繪が少し許りあるだけで、他は皆油繪のみです。今戸橋の月夜とか、又行燈の下で裁縫をやつてる女とか云ふ繪のみが多かつた、それでも非常な満足を得て歸つたものです。今此時感じた程の面白い繪に接したいと思つて居ますが、

奈何しても駄目です。

それから少し經て、私は松本民治と云ふ先生に畫を教はりに行きました。此先生は矢張西洋畫の名家で、一時は圖畫の手下などを著述されたことがあります。この先生は其頃芝三田に住まはれて、私は小學校の先生の紹介で、その先生と一緒に習ひに行つたものです。すると其先生の門生で、三輪さんと云ふ人が居ましたが、此人が其時熱心に水彩畫を稽古して居られた、中々上手で、私は先生の油繪の巧なのを見るよりも、却て其三輪さんの水彩畫の方が、非常に面白く思ひました。私も早く三輪さんの様に水彩畫が描きたくて堪らない、然し先生は何んでも澤山鉛筆畫をやらなければならぬと云つて、鉛筆畫の手下許りを呉れました。

或日三輪さんは澁谷の方に寫生に行かれた、今は電車などが通じて昔の俤は全く無いのですが、丁度思出すと古川端の天現寺橋の所です。其時は一面の蘆が生へて、水車が一軒あるのみで、非常な田舎にでも行つた様な氣持でした。三輪さんは水彩畫で其所を寫生された。紙はワツトマンでは無かつた。一枚四錢位の畫學紙だと記憶して居ます、高い蘆が生茂つて居て、水車場の屋根が其上に頭を出して居ました。而して小供が釣をして居たのも覺えて居ます、それが何とも云へぬ程上手に出來て居ました。其場所が私の平常遊びに行く所だけに懐しくなりました。早く又三輪さんが寫生に行けば可いにと、時々三輪さんに訊れました。然し三輪さんは中々容易に寫生に行きません。私

は一日その繪を三輪さんから借りて、私の家に持つて歸り、両親に見せたものです、然し餘り褒めないで、私は大變に失望致したこともありましたが、其後三輪さんは、先生と一緒に八王子の方に寫生に行かれた時、又水彩畫を二三枚寫生された。それが秋の景で、錦の様に紅葉が山に一面彩られて、その下に農家が列んで居た圖です。セピヤで古い家を描かれたのが、恰も實物を見る様な氣がしました。今三輪さんは何所に奈何して居られるか、一度其時の畫を見たいものと思つて居ます。若し三輪さんの畫が見られぬならば、せめて其時三輪さんの畫を見て得た感喜だけでも得たいものと思つて居ます。(未完)

糸満の剝舟に就て

糸満は琉球の首都那覇から二三里許りの處にある漁村で、圖は其處の漁船を描いたものである。往昔は皆この船に乗つて海上遙かに臺灣あたり迄出掛けたさうだ、若し不幸にも、途中で暴風等に遭遇した折は、舟と舟とを三艘位結び合せて、風のまにまにまかせて置けば、轉覆の恐れもなく至極安心して居る事が出来る、又若し一艘丈けて覆へつた折には、一人で元に戻して平氣で漕ぎ戻る事が出来るさうだ、だから始めて汽船が此の地方へ航した折には、皆若しあの船が引覆つた時にはとても元にかへすことが出来ないからと云つて誰も乗るのを恐しがつたさうだ。

(吉田博氏談)

私に畫か描けたらば(一)

磯 萍 水

私に畫か描けたらば、私は何を描くでせう、難かしい問題です、迂濶には答へられません、文字でさへ、満足に書けない私が、何で畫がかけませうか。然し私は、自分で答へやうが爲めに、此問題を提供したのであります、實は少しばかり、二用意はして有るのです。

私は忙しい裡の休息を利用して、大擱みに其二三を擧げたいと思ひます。

私は山でも水でも、有の儘を描き出すに留まらなくて、その時々氣分を表はしたいのです、色でもよい、線でもよろしい、そして線には、『山岳家の見たる山の色』とか、『水郷の塵火』とか、『飛驒への途』とかつけて、觀る人に注意を與えて置くのです、私はその題によつて、私の得た二三の印象を並べて見ます。

秋でした、私が一人で、鳥居峠の頂上の鳥居の前に立つたのは、落日の光りが、精あるものやうに、見る／＼雲の裡に舞ひ込もうとして居る、風は嘆のやうな音を立てて、空の空の彼方から落ちて來て、私の襟を吐りて、袖を飜がへして、すぐ脚の下の椽とちの森を管めては、一散走りに、範原の宿をいじめにかかつて、その板戸をゆるがして、爐の楯火を騒がせやうとして居る、群山の中の落日の秋の暮、實にこの時の氣分を、謂ひ表はすのは、くどく／＼した文句などを並べる閑はない、悲壯の一語でもら謂ひやうはない、落日よ、落日よ、私の好きな落日よ、私は